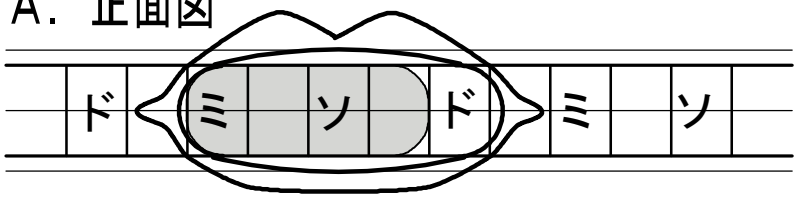
ベース奏法の略図と説明

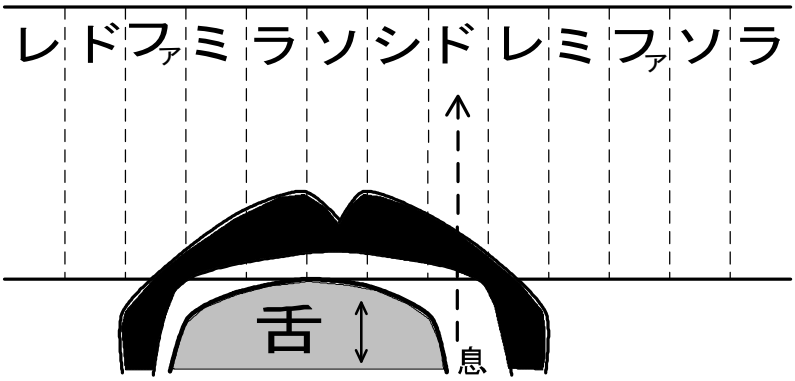
〔中音部のドを吹く音で説明、吸う音も同じなので省略〕

A．正面図



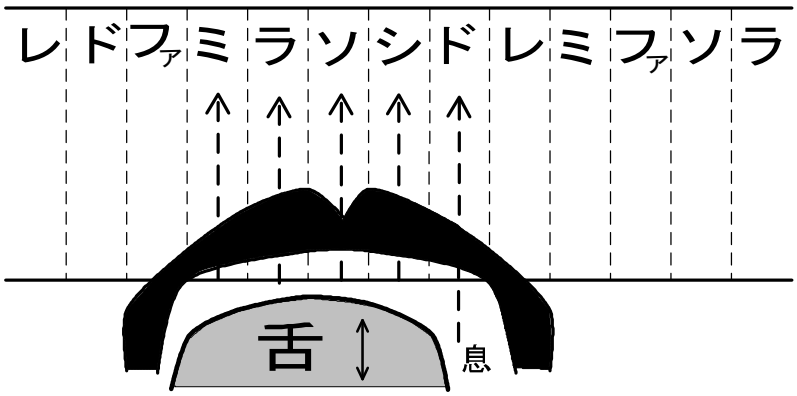
▲上図のように常に舌を付けたまま演奏する方法をタングブロッキング奏法と言う（略してタンキング）
※ベースを入れない場合の曲でも口の中が広まり、まろやかな音色が出ます。

B．上面図（舌を付けた状態）



▲舌は先端部を軽く当てるだけでよいこの状態で吹いたときは、完全なドの音だけ、そのまま吸ってみて隣接の吸う音が出なければ理想の位置。

C．上面図（舌を離した状態）



▲舌は少しだけ離すこと、この状態で吹くとミソドの和音になる。ラシにも吹く息が流れますが音は出ません
※吹いたまま、タンキングから舌を離すと和音、舌をつけたら完全なドの音が出るようにする。

ベースで口を広げる大きさ

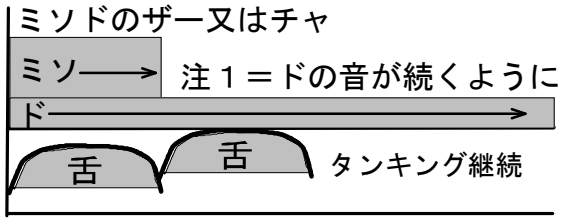
① ７穴⇒大ベース
② ５穴⇒一般的に大ベース
③ ３穴⇒小ベース

※大・小ベースは、基本的に音の大きさではなく、大ベースを１オクターブ低い音に置き換えるワルツ奏法もある

ベース奏法の具体例

① 同時ベース（音の流れ）

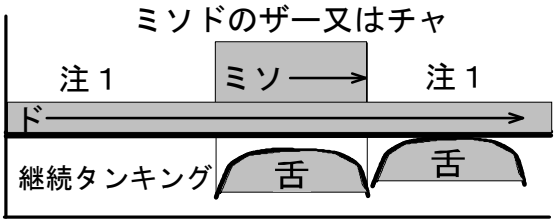
D．舌の位置と音の関係図



▲タンキングで音を出す瞬時に舌を離し、離してから一定の間隔で舌を付ける。
※音を出す、又は吹き直す時にベースを入れる。

② 後打ちベース（音の流れ）

E．舌の位置と音の関係図



▲音を出して、又は音が継続してから舌を瞬時に離し、離してから一定の間隔で舌を付ける。
※音を出している途中にベースを入れる。

③ ベースのまとめ

●ベースは、舌を離したときに出るものであり、ベースの長さは、舌を付けるまでの間隔で決まり、出ている主音よりも短い、主音と同じ長さならば、それは３ホール等になり、一般的に軽やかなベースは瞬時の長さ＝短ベース（チャ）がよい
●ベース奏法＝メロディーが主体でありベースは主音を殺す大きな音はよくない